



## ひみこ 卑弥呼は、どんな人だったの



神のお告げを伝えるという形で、政治を行った、  
ひみこ  
巫女のような女王だよ。

### 『魏志』倭人伝に書いてあること

卑弥呼について書かれたものは、紀元280～290年ごろの中国の歴史書『三国志』の中の『魏志』倭人伝で、次のようなことが書いてあります。

戦争をしていた国々が、共通の王として置いた女王だった。

鬼道（まじゅつ魔術、じゅじゆつじゅ術、あやしげな術）を使うのが得意で、神秘的な力で人々をひきつけ、国を治めた。

年をとっても結婚せず、弟に助けられて国を治めていた。

王になってから、卑弥呼は、召し使いの女性1000人に、身の回りの世話をさせていた。

宮殿のおくで生活している卑弥呼の姿を見たものは少なく、声をきくことが許されているのは弟だけであった。弟が食事を運んだり、伝言のために出入りしていた。

宮殿にいる卑弥呼を守るため、物見やぐら、さくを設けていつも兵士が見張っていた。

239年から、たびたび魏に使節を派遣して貢ぎ物をおくり、「親魏倭王」のよび名や金印紫綬（むらさきいろ紫色の組みひものついた金印）・銅鏡などをおくられた。

狗奴国との戦いの最中に死に、大きいお墓にほうむられ、奴婢100人余りが殉死（主人のあとを追う自殺）させられた。

### 『魏志』倭人伝から推測されること

このような文章から、卑弥呼は、神がのりうつって、神のことばを人々に伝える、巫女・魔術師のような人だった、と見られています。弟と協力して、政治のやり方を決め、それを、神のお告げという形で発表していたのでしょう。おくにこもって、人々の前に姿を見せなかったのは、自分を神のような、神秘的な人物にすることで、人々に、自分をあがめたり、おそれたりする気持ちを生じさせる目的が、あったのかもしれない。